

要 約

報告番号	甲 ㊦ 第	号	氏 名	富 田 洋 平
主 論 文 題 名 Wide-Angle Viewing System versus Conventional Indirect Ophthalmoscopy for Scleral Buckling (網膜剥離に対する広角観察システムを用いた強膜バックリング術と従来型の双眼倒像鏡を用いた強膜バックリング術との比較)				
(内容の要旨) <p>網膜剥離に対する治療として、1950年代から強膜バックリング術が行われてきた。従来は、手術中の眼底観察に双眼倒像鏡を用いており、術者のみしか術野が見えないことから手術訓練者にとっては手技の習得までに時間がかかる術式とされていた。また、術者は長時間一定の姿勢を保つ必要があるため、首や腰を痛める術者も多くいた。一方、網膜に対する手術として、広角観察システムを用いて顕微鏡下で眼底を観察しながら行う硝子体手術が世界中で普及した。この方法では広い視野と明るい術野を顕微鏡もしくはモニター下で確認しながら手術を行うことができる。また、術者は座りながら手術を遂行するため、術者への肉体的な負担も少ない。この広角観察システムを、強膜バックリング術に応用した症例報告が、近年なされてきている。しかし、従来の双眼倒像鏡を用いた強膜バックリング術と比較した報告はなく、その合併症や予後については明らかではなかった。そこで広角観察システムを用いた強膜バックリング術、もしくは従来の双眼倒像鏡を用いた強膜バックリング術の術前、術中、術後の状態を比較検討した。症例は39例の連続症例で、同一術者が、手術時期により23例は従来通りの双眼倒像鏡を用い(以下、従来群)、16例は広角観察システム(以下、広角観察群)を用いた。術前の患者背景、術後合併症においては差がなかった。また最終的な網膜復位率は、従来群の症例で95.7%、広角観察群で93.8%と、有意差はなかった。しかし、術中に生じた角膜上皮障害が、広角観察群において有意に少ないという結果となった($P<0.05$)。これは、広角観察システムを使用する際、角膜上に粘弾性物質を塗布し角膜の乾燥を防いでいることや、周辺への圧迫による眼底検査の際に、双眼倒像鏡に比べて圧迫量が少ないため、角膜にかかる負担が少ないためと考えられた。また、手術時間は、全体では有意差がつかなかったが、部分バックリング手術において、広角観察群が、有意に短い結果となった($P=0.02$)。これは眼底が見やすいことによる術中の冷凍凝固や裂孔のマーキングの時間の短縮が影響していると考えられた。また、広角観察システムを用いることにより、モニターを通じて術野を他のスタッフとも共有できるため、指導者側が術中にアドバイスでき、訓練中の術者にとってはより安全に手術がすすめられると考えられる。また、研修医にとっても、手術の様子がよくわかるため、教育にも効果がある可能性があった。</p> <p>以上より、今後、更に症例数を増やし、長期経過をおって検討したものを報告する必要があるものの、広角観察システムを用いた強膜バックリング術の安全性と有用性が示された。</p>				